

# 經濟論叢

第九十六卷 第一號

---

- 第三のカザノーヴァ (1)……………穂 積 文 雄 1
- ハリスンの標準原価計算論における  
原価差異分析について……………野 村 秀 和 23
- 定額資本予算の最適配分問題……………浅 沼 萬 里 41
- ネットワーク・フロー問題と輸送問題……………小 林 清 晃 58
- 

昭和四十年七月

京 都 大 學 經 濟 學 會

### 第三のカザノーヴァ (1)

穂 積 文 雄

#### I

クレオパトラといえば、ひとは、すぐ、絶世の美人をおもう。ネロといえば、ひとは、すぐ、残虐な暴君をおもう。ナポレオンといえば、ひとは、すぐ、不世出の英雄をおもう。そして、カザノーヴァといえば、ひとは、すぐ、稀代の<sup>おんな</sup>たらし (seducor) をおもう。<sup>おんな</sup>たらしは、背倫である。勃徳である。だから、ひとは、かれを、「神にそむくもの」という<sup>1)</sup>。だから、ひとは、かれを「罪あるもの」とよぶ<sup>2)</sup>。だから、ひとは、かれにおいて、「悪徳の権化」をみる<sup>3)</sup>。かくて、かれの悪名は、いまや、天下にかくれもない。

だが、その悪名は、どこから来たのであるか。

おもうに、それは、かれみずからの手になる「回想録<sup>4)</sup>」によるものでなければならない。18世紀の初頭、ベニスの<sup>しがないどさま</sup>わり級の役者夫婦の間にうまれた名もない庶民の一人にすぎないかれ。クレオパトラの美貌ありともおもえぬかれ。ネロの暴虐のないかれ。ナポレオンの功業もないかれ。そのようなかれを、今日、たれがしろ。その名はその死とともに、むなしく、忘却のかなたにうづもれたことであろう。いな、事実、うづもれていた。それも、まだ死の来る前から、かれはひとびとからわすれられていた。それでリーニエ公 (Le Prince de Ligne) は、かれが有名な画家の兄弟であったと注釈をつけねばならなかった。そのかれを、忘却のかなたより、よみがえらしめたものは、

1) William Bolitho, *Twelve Against the Gods*, Simon & Schuster, New York, 1929.

2) Philipp Beaufoy Barry, *Sinners Down the Centuries*, Jarrolds, London, 1928.

3) Sidney Dark, *Twelve Bad Men*, Thomas Y. Crowell Company, New York, 1929.

4) *Mémoires de Jacques Casanova de Seingalt*, écrites par lui-même, édition originale, la seule complète, Paris, Ernest Flammarion, (without date, probably, 1900). 以下, "Mémoires" とよび、参照は、この版本による。

実に、かれが、晩年、ボヘミアはダックス城中においてかきのこした、あの有名な「回想録」にほかならない。まことに、「回想録」あつてのカザノーヴァである。まことに、「はじめに『回想録』あり。『回想録』カザノーヴァとともにあり。『回想録』はカザノーヴァなり。」である。まことに、「カザノーヴァは自分自身の創造物<sup>5)</sup>」である。「今日においてカザノーヴァという冒険家となっている人物は、カザノーヴァという作家の作品なのである<sup>6)</sup>」。しかるに「回想録」凡12巻、すべて、おんなたらしの回想をもって見たされている。ひとは、そこに、おんなたらしにあけくれるかれをみることになる。かくて、かれはおんなたらしの悪名を天下にはせるにいたるのである。

だが、それは、はたして、真実であるか。かれは、はたして、単なるおんなたらしにすぎないか。はたして、おんなたらし以上のなにもものでもないか。はたして、おんなたらし以下のなにもものでもないか。

たしかに、「回想録」はかれのおんなたらしの回想をもって、見たされている。それをいなむことはできない。たしかに、われわれは、そこに、おんなたらしにあけくれるかれをみる。それにまちがいはない。たしかに、そのとおりである。しかしながら、「回想録」は、はたして、ただおんなたらしの回想にのみ終始したにすぎないものであろうか。それ以外のなにもものでもないものであろうか。もし、そうであるとすれば、それは一の誨淫の書にすぎないものになるわけである。では、「回想録」は、はたして、一の誨淫の書にすぎないものであるか。あるいは、しからん。士君子は手にするを恥ずるといわれる。大方の父兄はこれをひもとくことを子弟に禁ずるのであろう。まさに悪書追放のやり玉にあがるは必定とかがえられぬでもない。しかしながら、それは、盾の一面というべきもの。「ひとしくあめなり。堯はこれを見て以て老をやしなうべしと思ひ、盗跖はこれを見て以て鑊をねやすべしと思ふ<sup>7)</sup>」。こころざすところこと

5) Félicien Marceau, *Casanova*, Gallimard, 1949. 小島直記氏訳「ある愛欲の生涯——ドンジュアンとカザノーヴァ——」(ミリオン・ブックス), 37頁。

6) *Ibid.*, 同上。

7) 田島錦治博士「東洋経済学史」, 135頁。

なれば、さとるところ、したがって、おなしからざるは、埋のしかるところ。いま、「回想録」についてみるも、また、しかり。「回想録」において、おんなたらしの記述のみをみて、また、他をみざるは、これ、みる、ひと、その興味・関心、ここにのみありて、また、他をかえりみるにいとまあらざるをものがたるものにあらざるなきを得んや、とはいえないであろうか。そういえば、はたして、詭弁のそしりをまぬがれることなきものであろうか。

すくなくとも、わたくしは、そうはおもわない。いな、それは、ひとり、わたくしのみではない。ハベロック・エリスも、また、そうおもわないものひとりである。かれは、「回想録」を誨淫の書とみない。いな、それどころか、これをもって、きわめて貴重なる文献として、推賞する。こころみに、その一端をあげれば、つぎのごとくである。

「回想録」が貴重なる所以は、実に、全欧18世紀の風習の画像 (a picture of the manners and customs of the eighteenth century throughout Europe) であるところにある。かれは、欧州を上は王宮より下はどんそこ (bas fonds) まで、くまなくみた。かれはフランスやイタリアの貴族たちの居城・オランダの豪商たちの快適な家庭・ポール・モール (Pall Mall) の自邸・居酒屋 (taverns)・宿屋 (inns)・百姓の小屋 (peasants' cottages) その他、どこでも、くらした。かれには思想的偏見がなかった。かれは多芸多趣味であった。かれはあらゆる人間のいとなみに興味をもった。かくて、かれは、かたにはまった意見をもって人世に対しなかった。かたやぶりの冒険家として、超然として人世に対した。同時に、かれは、学者であり、文筆の士であった。18世紀の、公平無私にして、生彩あふれる画像 (a vivid and impartial picture of the eighteenth century) として、その強固な堅実さにおいて、その明朝・穩健な懷疑主義において、その清澄・安楽な快關さにおいて、その芳醇な退廃において、この「回想録」に比肩しうる記録は、ほとんどあり得ない<sup>8)</sup>。

8) Havelock Ellis, *Affirmations*, London, 1898, p. 129.

したがって、エリスは、カザノヴァにおいて、単なるおんなたらしをみない。かれがカザノヴァにおいてみるものは、行くとして可ならざるはなき精力絶倫・能力抜群のひとである<sup>9)</sup>。

たいしたちからのいれかたである。それにしても、エリスは、ひともしるセックス研究の大家である。セックス研究家にとりては、カザノヴァのごとき人物は、またとない貴重な研究資料であろう。そこに愛情もわこうというもの。だから、そのように、ちか<sup>ち</sup>をいれることにもなる。そういうみかたをするひと、あるかもしれない。それでは、せっかくのわたくしの論旨は説得力をうしなうことになる。うしなわないまでも、よま<sup>よ</sup>まることはたしかである。それでは、こまる。そこで、さらに、ステファン・ツバイクに登場してもらうことにしよう。このするどい史家も、またいう。

カザノヴァの時代を記録したもので、またかれの後に<sup>後</sup>に出たもので、——バルザックをのぞいては、——カザノヴァほど、多彩な生活を現実にとんだものは、ほとんどない。1世紀にわたる生涯を、これほど傍若無人にすごしたものは、かつてない。かれの武勇談をうたがってせせらわらったり、かれの不義・密通にしかめつらしてまゆをひそめたりして、一体なになる。……このジャコモ・カザノヴァは断然、世界の文学に入るものだ。かれは批判に堪えて後世にのこる。道德水準においてかれより高い<sup>ライオンズ</sup>作者たちがみなわすれさられたる後にも、かれは、のこる<sup>10)</sup>。

ポール・ネットルというひと、また、つぎのごとくいうている。

カザノヴァの回想は18世紀のあらゆる伝記 (personal histories) 中、その興味ふかきことにおいて、そのひろく読まれることにおいて、断然、群をぬいている。その痛快さにもかかわらず——あるいは、その痛快さの故に

9) The energy and ability which Casanova displayed in gratifying his instincts would have sufficed to make a reputation of the first importance in any department, as a popular statesman, a great judge, a merchant prince, and enabled him to die worn out by the monotonous and feverish toil of the senate, the court, or the counting-house (H. Ellis, *ibid.*, p. 95).

10) Stefan Zweig, cited from "The Other Casanova" by Paul Nettl, N. Y., 1950, p. vii.

というべきであろうか、おそらく、そうであろう——それは、その時代の、風習・道徳のもっとも重要な根本資料 (the most important source materials on the manners and morals of their time) と肩をならべる。カザノーヴァほど、多く、見・読み・観察した人物を、その時代に求めることは困難であろう。かれは、貴顕の門にも売春婦の巷にも、どこでもあらゆるところに気軽に出入した。かれは、多数の有名頭采の男女と親好をむすんだ。かれは、その見聞したところを、あますところなく、ことごとく、かたまった。かれは、きわめて淡々と、しかしながら、きわめて情趣ゆたかに、かたまった。だから、きくものは、みな、うっとりとした<sup>11)</sup>。

まことに、カザノーヴァは、よい知己を後世に得たものである。かれを、地下に立たし、これらの言をきかせたならば、かれの感懐は、はたして、いかにあるであろうか。おそらく、かれは感激の涙禁じがたきものあるをおぼえざるを得ないであろう。しかしながら、人世は、まことに、皮肉なものである。こうして、史家の興味がカザノーヴァにむかう。すると、カザノーヴァの研究がさかんとなる。そこで、実証がおこなわれる。その結果、カザノーヴァの「回想録」の信憑性について疑義をさしはさむものが出るをみることになる。疑義も疑義、この「回想録」がはたしてカザノーヴァの手になるものなりやという疑義、いな、それどころか、そもそもカザノーヴァなる人物がはたして存在したであろうかという疑義すら、あらわれるしまつである。それは、ちょうど、シェクスピアは、はたして、実在したか。シェクスピアの作品のといわれているものの真の筆者は、はたしてたれであるか、という疑義と類をおなじくするものである。そして、シェクスピア・ペーコン論におけるがごとく、ここでは、「回想録」の筆者にスタンダールを擬するものさえあるという次第<sup>12)</sup>。

11) Paul Nettl, *ibid.*, p. 1.

12) "Paul Lacroix paid Stendhal the huge compliment of suggesting of that he had written the *Memoires*, a sufficiently ingenious suggestion, for in Stendhal's Dauphiny spirit there is something of that love of adventure which is supremely illustrated in *Casanova*." (H. Ellis, *ibid.*, p. 105.)

もっとも、史家が史実に徴して疑義をさしはさむとなれば、何事が疑義の種ならざるを得ようか、とも、いえる。そういうても、かならずしも、いいすぎのところがこうむることにもならないのではないか。いま、あげたシェクスピアについての疑義はおろかなこと。さかのぼれば、イエス非実在論さえあるくらいである<sup>13)</sup>。さすがに、カザノーヴァ非実在論は、今日これを主張するものはないといってよかろうとおもう。あまりきかない。それも、ことわりであろう。げんに、わたくし蔵するところの「回想録」の巻尾には、カザノーヴァが友人に宛ててしたための書翰が計11通まで附載されておる<sup>14)</sup>。さらに、カザノーヴァと親交のあったフランス・ド・リーニュの「カザノーヴァに関する断片」まで添付されている<sup>15)</sup>。それに、事実の真实性に対する疑義においても、過誤・誇張・粉飾にほかならぬものがある。しかるに、それらは、かりに、それらの過誤・誇張・粉飾をみとめるとしても、そのことは、かえって、カザノーヴァ非実在論に対しては、有力なる反証の役割をはたすものとみることさえできようというものである。これでは、カザノーヴァ非実在論がなりたちようがないことになるのも、むりはあるまい。そして、今日においては、カザノーヴァ自身がその「回想録」の筆者であることは、まず、うたがないところとせられている<sup>16)</sup>。そういつてよかろうとおもう。

それにしても、それでは、事実についての疑義はどうか。これは、どうも、いなみえないものがあるようである。そのことは、みとめなければならぬようである。そうすると、史料としての価値が問題とならざるを得ないことになる。それでは、「回想録」は史料としての価値はないということになるのであろうか。ないとかんがえるひともあるかもしれぬ。いな、しれぬ、ではない。あるにちがいない。しかし、わたくしは、かならずしも、そうは、かんがえない。

13) Karl Kautsky, *Der Ursprung des Christentums*, 1923/3.

14) *Mémoires*, VI, pp. 449-458, "Lettres à M. Faulkinher, à Oberlentersdorf, écrites par son meilleur ami, Jacques Casanova de Seingalt", (1) (Janvier 1792).

15) *Ibid.*, pp. 459-471, "Fragments du Prince de Ligne sur Jacques Casanova."

16) "... we know that, as Armand Baschet first proved, Casanova himself really wrote his own Memoires." (H. Ellis, *ibid.*, p. 105.)

わたくしは、その史料としての価値は、依然としてたかく評価されることができるとかんがえる。けだし、そこには、過誤もあろう。錯誤もあろう。誇張もあろう。粉飾もあろう。はなはだしきは創作・虚構・捏造さえないとはいえないであろう。そこで、史家は、これを、ごくろうにも、指摘・摘発して鬼の首でもとったように得々とする。それは、それで結構なことである。わたくしは、その労を多とするにやぶさかなものではない。けだし、真実を追求することは、わるいことではない。だから、それは賞されてよい。これをとがむべき理由を、わたくしは、しらない。よって真相があきらかになることは、それは、よいことである。それはよろこばれてしかるべきである。これをかなしむべき理由を、わたくしは、しらない。しかしながら、だからといって、そのことから、ただちに、「回想録」に史料価値なしということにはならないのではないか。もし、そういうひとがあらば、わたくしは、そのひとの浅慮をおしまずにはいられない。わたくしは、そのひとの短見をかなしませずにはいられない。なぜ？ それは、こうである。

われわれは「回想録」に史料価値をみとめる。その場合、それは、18世紀におけるヨーロッパ一帯の風俗・習慣についてのそれである。しかるに、上述の過誤・誇張・粉飾乃至創作・虚構・捏造は、ほとんどカザノーフの一身上におこるできごとである。いま、それらのできごとに、過誤・誇張・粉飾乃至創作・虚構・捏造があったとしても、それは、ただ、それだけのことである。もっとも、それらのできごとそれ自体を問題とするときには、それは、きわめて重大である。それは、もとより、いなむあたわざるところである。そのかぎりにおいては、「回想録」は、史料としては、その価値に問題がある。それに、ちがいはない。しかしながら、その場合でさえ、なお、全然、価値なしとは、いいがたい。たとい、そこに、まぢがいがあっても、われわれは、そのまぢがいを通じて真実に到達することができるのではないか。ところが、それがない場合にはそうはいかない。それさえできぬことになる。そうかんがえられる。そうかんがえれば、まぢがいでも、あるはなきにまさる。そういうことになる。そ



のかぎりにおいて、そこに史料価値をみいだすことができよう。それを否定するわけには、いかないであろう。そういうことができるであろう。要は、そのとりあつかいかたいかんにある。要は、その利用方法いかんにある。もちいかたによっては、毒もくすりとなる、という。それとおなじことである。理においてことなるところはない。そういってもよいのではなからうか。しかも、そればかりではない。問題は、さきにも、いったように、かならずしも、カザノーヴァの一身上のできごとにはかぎらない。ひろく、18世紀におけるヨーロッパの風俗・習慣にある。そこでは、区々たるカザノーヴァの一身上のできごとの真否いかんのごときは、それほど問題とはならない。しからは、いま、かれの一身上のできごとの真否いかんによって、ただちに、「回想録」の史料価値を云々するのは、いかながなものであろうか。それは浅慮でなくてなんであろう。それは短見でなくてなんであろう。わたくしが、それをおしむ所以である。わたくしが、それをかなしむ所以である。だから、わたくしは、すくなくとも、わたくしは、かくのごとき浅慮をとることはできない。すくなくとも、わたくしは、かくのごとき短見にくみするわけにはいかない。

しかも、ことは、それだけには、とどまらない。というのは、こうである。およそ、ものの真実は、そのものをあるがままにみるところに、なりたつ。だから、およそ、ものをみるにあたっては、あるがままにみるものがぞまれる。かくて、あるがままにみられたものほど真実にちかい。したがって、また、あるがままにみられたものほど、史料的価値はたかい。そうかんがえられる。ところが、かなしいかな、われわれには、ものをあるがままにみることはむずかしい。そのよってきたるところは、われわれは成心・先見、はなはだしきは、偏見をもってものをみがちであるからである。そして、それらのものはその根源を多く利害関係の中にもつ。したがって、さきに引いた、「ひとしくあめなり。堯はこれを見て以て老をやしなうべしと思ひ、盗跖はこれを見て以て鎌をねやすべしと思ふ。」という例は、また、まさに、この場合を説明する好例たるを失はないであろう。また、いま、われわれの問題となっている、過誤・

誇張・粉飾乃至創作・虚構・捏造が主として、カザノヴァの一身上のできごとにおいて指摘・摘発せられるということは、まさに、この理をうらがきするものでなければ、ならない。けだし、利害関係は自己のできごとにおいて、そのもっともふかきをみるわけであるからである。じぶんのことはじぶんが一番よく知っている。ひとは、よくそうおもう。ひとは、しばしば、そういう。あにはからんや、ことは、往々にして、逆である。語にはいわずや、「おかめ八目」と。だから、カザノヴァの過誤・錯誤・粉飾乃至創作・虚構・捏造は、かれの一身上のできごとにおいて、まさに、ありうべきところ、なければ、かえって、ふしぎとするところ、そういうことさえできるところ、そういっても、かならずしも、いいすぎではあるまいとおもわれる。ということは、やがて、そうでないところのものは、逆に、もっとも、過誤・錯誤・粉飾乃至創作・虚構・捏造と縁のとおいところということになるであろう。そこでは、ものは、よりよく、そのあるがままにおいてみられるということになる。したがって、そこにあらわれるものは、もっとも真実にちかいところということになる。したがって、そのものは、史料の価値がもっとも大きくあるべきはずということになる。そうならねばならない。そういうことができるであろう。わたくしは、すくなくとも、わたくしは、そうかんがえる。そして、そうかんがえるとき、わたくしは、18世紀欧州一般の風俗・習慣の史的資料としての「回想録」の価値をいよいよたかく評価せざるを得ないことになる。

ここで、わたくしは、モンテーニュの言をおもいださずにはいられない。かれはいう。

……単純粗野ということはいつわりのない証言をするのに適した一つの条件である。なるほど気のきいた人たちは、より綿密により多くの物事を見るけれども、とかくそれに註釈をつけたがる。いや自分の解釈に箔をつけ、これを人に信じさせたいので、いくらか話を変えないではおられない。つまり物事を決してありのままに示さない。必ずそれをまげて、自分の眼に映った顔つきをそれにかぶせる。そして自分の判断に値打ちをつけ、そこに君たち

の注意を引くために、とかく題材によけいなものをつけ加え、それを伸ばしたり拵げたりする。だからこの場合には、はなはだ正直な人間か、でなければ、むしろきわめて単純で、虚構の事柄の上に誠らしきを押したてただけの力のない人間、少しも自分の考をもたないくらいの人間の方が、いいのである<sup>17)</sup>。

なんとなれば、カザノーヴァの回想録はいうまでもなく一のアウトバイオグラフイである。一のコンフェッションである。そういうことができるであろう。しからは、そこで、かれが意識してかた然とするところのものは、自己の一身上におこったできごとということになるであろう。だから、そこでは、どうしても、モンテーニュのもとむるものをみいだしがたいことになるであろう。そこに、単純・粗野・正直をもとむることはむづかしいことになるであろう。これに反して、18世紀欧州一般の風俗・習慣をしるすことはかならずしも、かれの意図するところではない。いうならば、それは副産物であろう。そういうことができるであろう。したがって、そこでは、かれの筆は無心にすべるであろう。そこには、単純・粗野・正直以外の要素のいりこむすきはありようがない。したがって、そこにみいだされるものは、ありのままの叙述ということにならざるを得ぬことになる。そういってよいであろう。さすれば、その史料的価値は、また、いよいよたかく評価されざるを得ないということにならねばならない。そういうことになるであろう。それだからである。

わたくしは、いま、ものを、そのあるがままにみることについて、のべた。しかしながら、このことについては、わたくしは、さらに、のべたいことがある。それはこうである。

たとえば、いま、交通博物館で、汽車の実物をみるとしよう。われわれは、その場合、汽車をあるがままにみるというであろう。しかしながら、はたして、そういえるであろうか。汽車は走るものである。しかるに、この場合、汽車は

17) Montaigne, *Essais*, Livre premier, Chap. xxxi, Des cannibales, 関根秀雄氏訳「モンテーニュ随想録」(縮刷版), 278頁。

とまっている。走るものは、それをその走るところにおいてみると、はじめて、それを、そのあるがままにおいてみるといえよう。走るものを、その走るところにおいてみないで、どうして、あるがままにおいてみるといえようか。それでは、あるがままにおいてみるとはいえない。さらにたちいっていえば、汽車はただ走るだけではない。客を乗せて走るのである。だから、駅における発着・客の乗降、さては、その混雑または閑散の状況等々においてもみなければならぬであろう。そうすることにおいて、はじめて、汽車をそのあるがままにおいてみるということがいえよう。しかるに、それらは交通博物館に陳列せられている汽車をみることによって達せられないところに属する。したがって、交通博物館における汽車を見ることは、かならずしも、汽車をそのあるがままに見る所以ではない。そういわなければならない。

ところで、いまあげた汽車の例は、うつしてもって学術書についてもいえるのではなからうか。しばらく、わたくしの興味をもつ社会史や経済史の専門書についてうかがってみる。なるほど、わたくしは、そこに明快な論述をみる。事実が明瞭になる。事情が明確になる。わたくしは、それに対して感謝の念禁じがたいものをおぼえる。わたくしは、それをいなまない。いな、いなむことはできない。しかしながら、そこでは、うごく社会や経済が、よく、そのうごくままにとらえられているであろうか。交通博物館における汽車に比せられることを、断呼拒否することを正当化するにたるだけの充分の根拠がみとめられるであろうか。わたくしは、かならずしも、みとめられないといおうとするものではない。わたくしは、かならずしも、学術書・専門書においては、事物がうごくままにとらえられていないとするものではない。しかしながら、それにしても、小説においては、それが、さらに、いっそう、そのうごくすがたにおいてながめられるということを否定するあたわざるものがあるということをおもうとするものである。だから、わたくしは、小説において、それらの事象が、いっそう、そのあるがままにおいてみられることをおもわざるを得ない。そういいたいのである。では、なぜ、小説においては、ひとやものがそのうご

くすがたにおいてながめられるのであろうか。なぜ、小説においては、それらの事象がいっそう、そのあるがままにおいてみられることができるのであろうか。それを説明するためには、また、さきの汽車の例にたちもどるのが便宜である。だから、そう、しよう。小説において、われわれは、汽車をそのうごくすがたにおいてみるることができる。そこにおいては汽車はそれをそのあるがままにおいてみるることができる。それは、小説は汽車を説くことを目的としていないからである。そういうと逆説めく。逆説めくが、しかしながら、それは事実である。いくら逆説めいても、事実なのであるからしかたがない。ふたたびいう。小説は汽車を説くことを目的としない。しかし——というよりも、むしろ、だから、というべきでもあろうか——そこにあらわれる汽車は、走っている。発着する。ときには混雑もしている。ときには閑散でもある。けだし、汽車そのものを説こうとする場合、そこでは、そのために、汽車を、それを取りかこむ周囲のもろもろの事情からきりはなすという操作がおこなわれるを普通とする。汽車をよりよく説くためには、そうすることが便宜であるからである。そして、それをとめてながめる。そうしなければ、汽車をよくみることはむずかしいからである。それはきわめてあたりまえのことである。そして、それは、それでよいのである。しかしながら、だからといって、そこに、さきにみた弊の生ずることはないないことになる。しかるに、小説は、汽車そのものを説こうとしない。汽車は、たとえば、相愛の男女の新婚旅行を説くときに二人が乗るためにあらわれるにすぎぬ。また、たとえば、悲恋の男女の離別にあたり、その一方を乗せるためにあらわれるにすぎぬ。しかしながら、それ故に、その場合、汽車は、それを取りかこむ周囲からきりはなされてはいない。それがあるがままの環境にあるがままのすがたにおいてあらわれる。また、作者の関心は、男女の和合乃至葛藤にある。汽車にはない。だから汽車についてはどちらかといえば無関心といってよい。だから、ただ、あるがままをあるがままにみるだけにおわる。そこには、誇張・粉飾乃至創作・虚構・捏造などいりこむ余地はない。したがって、また、この場合、モンテーニュの心配も杞憂にお

わるであろう。かくてわれわれは、小説において汽車を、そのあるがままにおいてみることができるのである。そして、それは、実に、それを説くことを目的としないから、そういうことになるのである。かくて、小説においては、われわれは、かえって、事物をそのあるがままにおいてみることができる。小説においては、われわれは、かえって、事物の真実にふれることができる。小説においては、われわれは、かえって、真相をしることができる。そういうことができるであろう。そうかんがえることができるであろう。すくなくとも、わたくしは、そうかんがえる。だから、わたくしは、小説に史料価値をみとめる。だからわたくしは、研究において、よく小説を利用する。わたくしの研究論文に——それはつたないものではあるが——よく小説よりの引用があるのは、このためである。

はなしがすこしく、わきみちにそれたきらいがある。ほんすじにもどろう。

ところで、こうみてくると、カザノーヴァの「回想録」の史料的价值は、ますます大なることを知らねばならない。けだし、それは、ここにいう小説とおなじような役割をはたすことができるはずであるからである。そのことは、上にみたところによって、充分、あきらかなところであろうとおもうのであるが、またこの「回想録」が、しばしば、小説そのものであるときえいわれるくらいである<sup>18)</sup> ことをしれば、おもいなかばにすぎるものが、なければならぬであろう。もちろん、それが、ただしいか、いなかは、あるいは議論の余地のあるところであるかもしれぬ。しかし、わたくしは、いま、それについて論ずるのいとまはない。それにしても、そういわれるということは、それが、それだけ小説にちかいことをものがたるものでなければならぬ。それはたしかであろう。そして、それなら、そのことは、それだけ、そのかぎり、この「回想録」の史料的价值を保証するものでなければならぬ。そういってもよいであろう。

18) "... let us forget that it is an autobiography and take it merely as a story. Its immense range of human interest, its audacious realism, its freedom from perversity, entitle us to regard it as a story of adventure." (H. Ellis, *ibid.*, p. 109.)

わたくしは、カザノーヴァの「回想録」について、ひごろ、上のごときかんがえをいだけじぶんをみだしていた。そういうかんがえをいだけくものが、それによって、18世紀のヨーロッパの経済について一の画像を製作しようという意図をもつにいたったとしてもそれにふしぎはあるまい。事実わたくしは、かねてより、そういう意図をいだいている。だが、かんがえてみれば、「回想録」は18世紀における全欧の経済状態それ自体を主題としているものではない。それは、前述せるところよりしてもあきらかなところである。あえて、ことばを加えるまでもないところである。だから、その場合どれだけの成果があげられるかは問題である。わたくしの愛読書の一つ、名著「長安の春」の著者はその小引においてつぎのごとき嘆を發している。

「全唐詩」四万八千首、それを片端から読んで見たところで、問題によっては、これだけの材料しか出ないのかと思ふと馬鹿馬鹿しくもあり、……いかにも閑文字を弄するが如き誹を免れぬかも知れぬ<sup>19)</sup>。

いまわたくしも、おなじ嘆を發することになるのではないであろうか。そうおもうと、いささか、気がしづむ。もとより、それは、それをてがけるもの能力にかかるといひうるかもしれない。能力によっては、眇たる一塊の石の内にも天地自然の秘奥をとく鍵をみいだすことも、かならずしも、不可能ではないといえよう。しかし、それにしても、それには偉大なる能力を要する。それは、大業でなければならぬ。わたくしには荷がかちすぎることをみとめねばならぬ。したがって、わたくしはいまだ、それをここに発表することができぬ段階に到達していない。そこで、わたくしは、いま、ここでは、しばらく、フォーカスをしばって、カザノーヴァにピントをあわそうとおもう。ことばをかえていえば、カザノーヴァの経済人としてのプロフィールをえがこうとおもう。カザノーヴァといえは、ひとはすぐ、おんなたらしをおもう。だから、これは第二のカザノーヴァ、あるいは、他のカザノーヴァということになるでもあろうか。しかしながら、わたくしは、すでにカザノーヴァを音楽の面よりえが

19) 石田幹之助氏著「長安の春」小引。

で「他のカザノヴァ」(*The Other Casanova*)と題する書が出ておることを知っている。そして、わたくしは、げんに、その一冊をもっている。すなわち、このエッセイに題して「第三のカザノヴァ」という所以である。

しかしながら、こういふと、ひとは、あるいは、いかにもしれない。カザノヴァにピントをあわせれば、そこには、過誤・誇張・粉飾乃至創作・虚構・捏造からの自由がないというおそれが生ずるのではないかと。しかしながら、わたくしは、これに対するこたえとして、さきにも、ちょっといったことばを、ここに、いま一度くりかえすことができるであろう。いわく。「たとい、そこに、まぢがいがあっても、われわれは、そのまぢがいを通じて真実に到達することができるのではないかと。ところが、それが無い場合にはそうはいかない。それさえできぬことになる。そうかんがえられる。そうかんがえれば、まぢがいでも、あるはなきにまざる。そういうことになる。そのかぎりにおいて、そこに史料価値をみいだすことができよう。それを否定するわけには、いかなうであろう。そういうことができるであろう。要は、そのとりあつかいかたいかんにある。要は、その利用方法いかんにある。もちいかたによっては、毒もくすりとなる、という。それとおなじことである。理においてことなるところはない。そういってもよいのではなからうか」。しかし、それではこたえとして不十分というひとがあるといけなう。だから、わたくしは、さらに、ここに、フェリシアン・マルソーのいうところを引くことにしよう。いわく。

……事件を創作したにせよ——特に創作の場合には——確に真実らしさや、地方色や、その時代の風習を尊重している。だからそれは同時に真実のものも証明しているという興味がある。一体回想録作者には何が大切なのだろうか？ 見て、語ること。カザノヴァはその二つの条件を充たすのである。彼の物語は活々としており、キビキビとしている。彼は多くのものを見た。いたるところ、あらゆる場所に足を踏み入れた。娼婦とつき合うように干候と交際した。控の間を通るように暖昧屋に入っていった。ここでは歓待され、あそこでは追ひ出された。欺き、欺かれ、ワルソーで博愛ぶりを発揮するか



と思うと、ミラノでは詐欺漢となった。どういう目に会おうがびくともしない。——そしていつも手真似をまぜて喋りまくる。到るところを通過して彼は物語る。少々嘘をまぜ、ときには創造して。だがその真実と同じくらい嘘によって物事をはっきりさせる。一人の人間、一つの世紀に対する貴重な証言なのである。回想録作者としては豊富でないにしても、彼がごちゃまぜの環境を仔細に語れば語るほど貴重な証言となるのである。テーマは「起源」のなかでその世紀についての見事な絵をわれわれに与えてくれる。しかしこれはまっとうな絵なのだ。彼はアルトワ伯が何人の召使をもっていたかを物語るが、いかにして、墮落させたかは語らない。王の厩舎について語るが、曖昧屋については何も云わない。劇場について語るが、女優の住いについては語らない。カザノーヴァはわれわれをそこにつれて行く。彼がいなかったら恐らく、1740年から1760年の間のカッフェーの音楽がどんなものであったか、若い娘がどうやって誘惑されたかを知ることはできなかつたろう。(それほどその方法は変わったのだ)。18世紀らしい性格をもち、今日ほとんど姿を消したこの階級についての貴重な証言なのである。中産階級、僧侶、美しい心の持主、香具師、年金や、閑職や、貴族の庇護をうけて暮らし、彼等をたのしませ、欺き、その勘定方となり、手紙を代筆し、彼等の犬を散歩させ、いつも笑い、忙しく、良い言葉をひろめる人びと。カザノーヴァはこの階級の代表的な人物の一人である。たしかに彼より上層の友人をも登場させているが、これらの人びとのうち、回想録を読んでみると、もっともしばしば姿を見せるのは三・四人だということがわかる。……彼は連中よりもすぐれている。もっと賢明で、狡くない。こういうのが、しかし彼の真の世界なので、ここでの彼の証言は他に代えがたい値打ちをもっているのだ<sup>20)</sup>。

## II

さて、わたくしは、これから、いよいよ、本論に入る。本論は、いうまでも

20) Félicien Marceau, *ibid.*, 小島直記氏訳, 同上, 19-20頁。

なく、第三のカザノーヴァのプロフィールをえがくことにおいてなりたつ。そして、第三のカザノーヴァのプロフィールをえがくことは、経済人としてのカザノーヴァのプロフィールをえがくことにほかならない。ところで、経済人としてのカザノーヴァのプロフィールをえがくということは、いかなることを意味するであろうか。およそ経済人とは、経済をいとむひとということになるが、経済は、もと、生産と消費の統一過程においてなりたつ。けだし、ひとは生きんとする。生きるためには物が要る(消費)。物は獲得(生産)しなければならぬ。かくて、ひとは生産したものを消費して、その生存をはかる。そしてそこにわれわれは経済がなりたつをみるわけである。そういつてよかろうとおもう。もっとも、今日の複雑な社会においては、ことは、そのように簡単なかたちではあらわれぬ。しかし分析して行けばついに、上の理に還元されるはずである。経済をそう解すれば、ひとはだれでも経済人である。いつでも、どこでも経済人である。とすると、経済人ということは、ひとということにほかならぬ。そういつてもさしつかえはない。そういつても、かならずしも、はなはだしいまちがいをおかしたことはない。そうかんがえるときは、経済人としてのカザノーヴァのプロフィールをえがくということは、カザノーヴァのプロフィールをえがくということにほかならないことにならねばならない。わがわが、「経済人の」ということはナンセンス以外のなにもものでもないことにならねばならない。そういうことになるであろう。それでは、いま、わたくしが第三のカザノーヴァ・経済人としてのカザノーヴァのプロフィールをえがくというのは、なにを意味するか。なるほど、経済人をひろい意味に解すれば、そういうことになるであろう。しかし、普通には、経済人といえは、国家公共団体の財政の企画・立案・収支に直接たづさわるもの、乃至財貨の生産・流通の過程におけるしごとをじぶんのしごととしてそれに直接に従事するものにかざられるが普通である。そして、わたくしが経済人としてのカザノーヴァのプロフィールをえがくというとき、その経済人というのも、また、その意味においてにほかならない。ところで、そういう意味において経済人としてのカザノーヴァをもとめれば、

われわれは、1757年から59年にわたる期間におけるかれにおいて、そのもっともいちじるしいものをみいだすことになるであろう。だから、わたくしはフォーカスをその期間における経済人としてのかれのプロフィールにあわせねばならぬことになるであろう。

かくて、経済人としてのカザノーヴァのキャリアは1756年、パリにおいてはじまる。これよりさき、1755年7月25日、ことによりて、逮捕・投獄せられた<sup>21)</sup>かれは、ながくくらしい幽囚を経て<sup>22)</sup>、1756年脱獄に成功し、途中いくたの辛酸をなめたる後、1757年1月5日水曜日パリに入る<sup>23)</sup>。

パリに入りたるかれは、ここで、つくづく、かながえる。しばらく、かれみずからのべるところによれば、それは、大略、つぎのごとくである。

パリは世界にたぐいのない市である。わたくしは、パリを祖国とおもわねばならない。なんとなれば、わたくしは祖国にかえるつもりはないからである。祖国はわたくしが、たまたま生をうけた国である。されどわたくしに対してつれなかった。しかも、わたくしは、なにものにもまして、祖国を愛する。おもうに、幼時をすごした地、あるいは、最初の印象をうけた地に対していただくわれわれの偏見が、われわれのイデーならびにわれわれの情愛に魔力を付与するによるのであろうか、はたまた、ベニスが、事実、比類のない魅力をもっていたからであろうか。されど、ここ巨大なパリにおいては、ひとの幸不幸は一に処世の巧拙にかかる。わたくしたるもの、得手に帆をあげるところがなければならぬ。

わたくしは、かつて、すでに、二年間滞在したことがある。しかしながら、当時はひたすら快楽をおいもとめ、いたづらに時を浪費し、かつて、<sup>ワオルチエソ</sup>運命の神のきげんをとることをしなかった。だから、運命の神も、また、その聖域を、じぶんにむけてひらいてはくれなかった。こんどは、ちがう。わたくしは運命の神に最大の敬意をはらわなければならないとおもう。わたくしは運命の

21) Voir *Mémoires*, III, 2, p. 41.

22) Voir *Mémoires*, III, 3-7, pp. 41-124.

23) *Ibid.*, III, 8, p. 176.

神の恩寵に浴する必要がある。わたくしは、おもう。わたくしは権門・勢家の知遇を得ること、才気を喚発すること、そのひとの氣にすることがわたくしの利益とおもわれるひとには、すべて、その意をむかえること、これらをおこたってはならない、と。

このようなかんがえからひき出される行動計画を、よく成功させるためにとるべき道を、わたくしはつぎのごとく判断した。いわく、パリ人のいわゆる悪所に足をふみいれぬこと、わたくしの、むかしの慣習および敵をつくるおそれのある要求を放棄することこそ、肝要である、と。けだし、これらのことは、わたくしが、なすに足るしごとにつくのに、堅実を欠き、適切でないように、わたくしがみえるようにするに、ちがいないからである。

わたくしは、わたくしのかんがえはきわめて至当である、とおもう。そしてわたくしは、わたくしの読者も、また、わたくしの意見に同意せられるものとおもう。

わたくしは、われとみずからにいきかした。言行をつつしめ、しからばわたくしの声誉は高まり、よって、わたくしを益することになるであろう、と。

わたくしは現在、かねについては心配はない。養父のブラガダン (M. Bragadin) の保証がある。いやしからざる家に住み、みすぼらしからざる身だしなみをととのえるには充分である。このことは、大都会では、とくに大切なことである。なぜなら、人を判断するのは、まず、これよりはじまるからである。云々<sup>24)</sup>。

かく、かれは、ここで、こころをいれかえ、青雲のこころざしをかため、榮達のゆめをおう。そのために、身をつつしみ、権門・勢家にとりいり、そのうしろだてにしようとする。そして、その場合、かれには、さいわい、かっこうなうしろだてができる。それは、ベルニ氏 (M. de Bernis) である。カザノーヴァとベルニ氏とのまじわりは、とおく、かれらのベニスにありし日の時代にさかのぼる。当時ベルニ氏は、フランスのベニス駐在大使 (ambassadeur de Fra-

24) *Ibid.*, III, 8, pp. 179-180.

nce à Venice)であった。そして、そのおり、カザノーヴァとかれは、女性関係で、相識り、相交り、深い関係でむすばれるにいたった<sup>25)</sup>。そのベルニ氏が、このとき、パリに帰還して、外務省の大官(chef ou ministre des affaires étrangères)になっていた。そこで、かれは「わたくしには、この大臣の庇護の下に幸運をつかむ充分の理由がある。」(J'avais bonnes de raisons pour fonder ma fortune sous la protection de ce ministre.)といて、さっそく、ベルニ氏の門をたたく<sup>26)</sup>。

はたして、ベルニ氏は、かれを、こころよく、むかえる。そして、かれのために、はかってくれる。そして、かれにいう。

ショアズール氏 (M. de Choiseul), 財務総監ブローニュ (Contrôleur Général de Boulogne) に紹介してあげよう。こころよく会ってくれるはずです。なに、ちょっとあたまをはたらかしさえすれば、ブローニュ氏からよいてづるをつかむことができるでしょう。必要なことは、かれの方からあなたに教えることになるでしょう。「聴いてもらえれば、もう、しめたもの」(l'homme écouté est celui qui obtient) ですよ。なにか王室の収入に役にたつことを考案しなさい。ただし、複雑・冗長は禁物。お書きになって、それがみじかいものであれば、みてあげますよ<sup>27)</sup>。

そこで、カザノーヴァは、満悦、感激して、大臣の許を辞する。しかし、王室の収入を増加する良策をみいだすにくるしむ。そこで、嘆声を発していう。

わたくしは、財政に関する知識は皆無だ。いくらあたまをしぼってみても、どうにもならない。あたまにうかぶのは、いろいろの新税というにくらしい・たわけた策だけだ。わたくしは、それらを、あらゆる角度からながめてひねくりまわしたあげく、なげすてた<sup>28)</sup>。

これによってこれを見れば、かれは、青雲のこころざしをたてはした。かれ

25) Voir *Mémoires*, II, 22-28, pp. 395-522.

26) *Ibid.*, III, 8, p. 176.

27) *Ibid.*, III, 9, p. 182.

28) *Ibid.*, p. 183.

は、榮達をゆめみはした。しかしながら、かれが経済人となるという意識をもっていたと信ずべき理由は別にない。たまたま、ベルニ氏のこの勸告から経済問題ととりくむことになり、ここに、かれの経済人としてのキャリアがひらかれることになるのである。

それにしても、このように、みずから財政知識の皆無を自認するようなものを、いやしくも、一国の、それも当時ヨーロッパでおしもおされもしない大国の財政策のために、財務総監に紹介するものもするものなら、紹介されたからといって、さっそくあたまをひねって、ないちえをしぼり出そうとして苦慮呻吟するものもするものである。今日のわれわれの眼からみると、いささかのんびりしすぎているような気がするのをいかんともしがたいものがありはしないか。あるいは、ここらあたりが、それこそ、「回想録」批判にいわゆる誇張云々のよって生ずる所以のものの一つということになるのでもあろうか。しかしながら、われわれは、そう、あっさりとかたずけてしまうまえに、つぎの諸事情を思うべきであろう。まづ、当時フランスがいかに財政の窮乏になやんでいたか、まさに、おぼれるものはわらをもつかむ、という状態にあったのではなかったかということ。また、こういうことは、当時あっては、かならずしもめづらしいことでもなかったのではないかということ。そういえば、われわれは、おもい出すことができる。すでに、これにさきだつこと約40年、1716年、スコットランドうまれの一介の野人ジョン・ロー (John Law) が、時の摂政オルレアン公 (Phillip III d'Orlean, Régent 1674-1723) の知遇を得て、その庇護の下にたちまちにしてフランスの財政・経済を左右するにいたったことを<sup>29)</sup>。また、カザノーヴァよりおくれること4年、1760年、あの「セヴィラの理髪師」や「フィガロの結婚」で有名なボーマルシェー (Pierre-Augustin Caron Beaumarchais) も、知名の財政家パリ・デュヴェルネー (Paris-Duverney) によって、一躍、財政事務にたづさわらせられ、産をなすにいたったことを<sup>30)</sup>。

29) Levasseur, *Recherches historiques sur le système de Law*, Paris, 1834.

30) 辰野隆博士「ボーマルシェーとフランス革命」, 48-49頁。

——なお、これは、さきで、くわしく説くことになるはずであるが、カザノーヴァの経済人としてのキャリアが現実開始されるのも、実は、このペリ・デュヴェルネーを通じてのことである。そういえば、カザノーヴァとポーマルシェーの二人の性行・経歴には、たぶんに類似したものがあるのを感じしめられる。時代の影響に帰せられるでもあろうか。閑話休題。そして、最後に、われわれは、ベルニ氏が、カザノーヴァの才能について、深く信じ、固く頼むところがあったからであると、かんがえることもできるのではないか、ということ、を、わすれてはならない。ことに、ベルニ氏とカザノーヴァの往年ベニスにおける特殊・格別の親交を想起すれば、このようにかんがえることは、すこしも無理ではないであろう。いな、そうかんがえない方が、かえっておかしいというものであろう。そういってもよいのではなからうか。

それはともかく、カザノーヴァの経済人としてのキャリアが、いよいよ、ここにひらかれることになる。それでは、それは、いかにひらかれてゆくであろうか。

それは、かれが、財務総監ブローニエをたづねることからはじまる。だから、この二人のであいは、経済人としてのカザノーヴァをあきらかにする上からみると、きわめて重大なことでなければならない。だから、わたくしは、まず、それから、うかがうであろう。(この項未完)